

Be Going to *Do* の命令用法について

多田羅 平

1 はじめに

話し手が聞き手に対してある行動をとることを強制する、即ち命令を下す場面は、使用言語の種類、如何を問わず存在する。英語の場合、命令を表すには通例、命令文 (imperative sentence) が用いられるが、命令文以外の形式を用いて命令を下すことも可能である。その一つとして本稿で取り上げるのが *be going to do* である。

Be going to do (くだけた場面では *be gonna do* となることもある) はそもそも「(主語が) 前から何かすることを決めていた」という現在における主語の「決定済みの意図」を表し、各人称主語と共に用いられる〔用例中の太字、括弧による文脈説明は筆者；以下同様〕。

(1) **I'm going to** play tennis this afternoon. (安藤 (2005: 102))

(2) He says **he's going to** be a dentist. (安井 (1994: 499))

2人称主語の場合は疑問文で用いられ、相手の「意図・計画」を尋ねる (安藤 (2005: 102))。

(3) "What **are you going to** do this evening?" "I'm washing my hair." (安藤 (2005: 102))

上述したように、*be going to do* は「すでに決定された主語の意図」、換言すれば、「すでに決まった予定」を示す表現である。このように、「すでに決まった予定」であるかのように聞き手に対して明言することで、聞き手がとる行動が話し手の支配下に置かれ、その結果 *be going to do* に命令を下す解釈が得られると考えられる。*Be going to do* を用いて命令を下すことが可能である事実を考慮すると、非英語母語話者が *be going to do* を用いて適切に命令を下すためには、次の2点を明らかにすることが重要であると考えられる。一点目は、どのような条件が揃えば *be going to do* に命令の解釈が得られるのか、すなわち、*be going to do* に命令の解釈を与える引き金となる要因である。二点目は、命令を下す一般的な表現である命令文の代わりに、*be going to do* を用いて命令表現を下す場合の意味上の違いである。本稿では大規模コーパスを駆使して *be going to do* に命令の解釈が得られる条件について議論すること、命令文との使い分けにおける違いについて議論することを目的とする。

2 命令の定義付け

Be going to *do* の命令用法について論じる前に、「命令」表現の意味するところ、すなわち「命令」表現の働きを確認しておきたい。Quirk et al. (1985: 831-832) は、多種多様な発話内行為 (illocutionary act) を表す目的で命令文が使用されると指摘した上で、発話内行為の種類によって命令文を列挙している。以下にそれらを示す〔各行頭の英小文字分類は便宜上筆者が付したもの〕。

(4) a. ORDER, COMMAND

Fire! [*fire* as verb] Make your bed at once.

b. PROHIBITION

Don't touch.

c. REQUEST

Shut the door, please.

d. PLEA

Help!

e. ADVICE, RECOMMENDATION

Take an aspirin for your headache.

Lock the door before you go to bed.

f. WARNING

Look out! Be careful! Mind your head!

g. SUGGESTION

Ask me about it again next month.

Let's have a party.

h. INSTRUCTION

Take the first street on the left.

i. INVITATION

Make yourself at home. Come in and sit down.

j. OFFER

Have a cigarette.

k. GRANTING PERMISSION

Help yourself.

l. GOOD WISHES

Enjoy your meal. Have a good time.

m. IMPRECATION

Go to hell!

n. INCRECULOUS REJECTION

Oh, come on. ['You don't really mean that.']

o. SELF-DELIBERATION

Let me see now. ('Should I go straight home?')

(4) における個々の効力は、言うまでもなく談話内における話し手と聞き手を取り巻く状況や話し手の感情などの語用論的要素に左右されるものである。(4e) における第2例目の文 “Lock the door before you go to bed.” を例に取り上げると、例えば家庭へ巡回警邏を行っている警察官が住人に対して、「防犯のためですから、寝る前に戸締りはしておいて下さい」という感情を込めて発信した場合は、「助言」と解釈されると考えられる。しかし、話し手と聞き手が同じ住居で生活しており、普段戸締りをするのが話し手であるとすると、話が変わってくる。話し手が仕事の出張で一晩家を留守にすることとなり、聞き手が戸締りをしなければならない状況になった際、話し手が聞き手に、「私の代わりに寝る前に戸締りをしておいてよ」と発言すれば、それは先の「助言」とは異なり「指図」と解釈される余地が多分にある。

同じ命令文でも語用論的な効力が一様ではないことは、上記の考察から容易に想像することができるが、一つ一つの効力の根本となっている事柄は、「話し手による聞き手に対する行動の期待・強制」であると言える。“Lock the door before you go to bed.” の例について言えば、警察官の発話、同居住人の発話のいずれにおいても、それぞれの発言の意図は「就寝前の施錠の期待・強制」である。

以上のことから、本稿では、命令表現とは、聞き手がある一定の行動をとることを話し手が期待・強制するために用いられる表現¹⁾ であると規定して次節に進む。

3 先行研究

多くの研究者により be going to *do* が命令の解釈を得ることが認められている。本節ではその中でも、Coates (1983: 203)、安藤 (2005: 102)、Swan (2005: 189) が取り上げた用例について、なぜ命令の解釈が得られるのかを検討する。

3.1 Coates (1983: 203)

(5) **You're going to** do this job for me without any more argument.

この文において、be going to *do* に命令の解釈をもたらす要因となる表現は2つ存在する。まず一つ目の表現は副詞句 without any more argument である。この表現の意味するところは「異論を唱えることなく」であり、そこから「聞き手の選択する余地をなくす」という読みが与えられ、一方的に要求を押し付ける命令の解釈が得られる。二つ目は、副詞句 for me である。この for は「利益」の意味をもつと考えられ、従って「私のために」という読みが与えられる。この表現は、当該行為が話者の利益となることを明示するものであり、「自分のためにこの仕事をする」ことを明言することで、without any more argument と同様、命令の解釈をもたらす要因となる。

3.2 安藤 (2005: 102)

(6) **You're going to** do it as I tell you.

この文において注目すべきものは、副詞節 as I tell you である。As I tell you は「自分の言う通りに」という意味を表し、この表現の存在によって「有無を言わず相手に自分の指示に従わせる」という話し手の意志が明示され、be going to *do* に命令の解釈を引き起こす。

3.3 Swan (2005: 189)

(7) **You're not going to** play football in my garden.

この文には、「『聞き手以外』が支配する領域」を示す副詞句 in my garden が用いられており、garden が my に修飾されていることから、in my garden は「話し手が支配する領域」としての機能を果たしていると思なされる。その領域内での行為に言及していることが、命令の解釈を引き起こす引き金となる。

3.4 Be going to *do* と命令の解釈

ここまで、先行研究の用例をもとに、特定の共起表現が be going to *do* に命令の解釈をもたらしていることを示してきた。しかし、インフォーマント²⁾によると、be going to *do* が命令の解釈を得るのに上記のような共起表現は必ずしも必要なわけではないとのことである。すなわち、(5) で例解すると、without any more argument と for me の両方、あるいは一方が用いられていなくとも、(5) に命令の読みを与えることが可能となる。文法・語法書の例文という立場上、読み手が用法を理解しやすいように、命令表現の引き金であることを明示するような要素を含む用例を採用している可能性は否定できない。共起表現の有無、並びに共起表現の

種類が *be going to do* に命令の解釈を与える要因として成立するか否かに必ずしも影響を及ぼさないと想定すれば、以下に示すような命令表現の基本的な成立要件³⁾を満たしていれば、*be going to do* を命令表現として解釈できるという仮説が立てられる。

- (8) a. 主語が *you* である。
- b. *be going to do* が主節の平叙文内に用いられている。
- c. *be going to do* と共起する動詞が自制可能な動詞である。

第4節では、*WordbanksOnline* を用いた用例分析によって、*be going to do* に命令の解釈をもたらす要因について詳しく議論していき、その上で、(8) の要件の妥当性を検討する。

4 WordbanksOnline を用いた考察

本節では、公開されている大規模コーパス *WordbanksOnline* [約5億5300万トークン；2014年11月現在] [<http://wordbanks.harpercollins.co.uk/>] を使って、*be going to do* が命令を表す表現として用いられている際の命令の解釈を引き起こす要因について考察し、一般化を試みた後、(8) の仮説が成立するか否かを検討する。

同コーパスの CQL [Corpus Query Language] に、検索式 [lemma="you"] [word="are|re"] [0,2] [word="going|gonna"] [tag="TO|V.*"] を入力して検索した結果、15,714例が抽出された。その中から1,000例を無作為抽出し、個々の用例を一つ一つ分析した結果、命令の解釈が得られる用例は、全部で37例確認された。この37例を対象に本節では分析を進めていく⁴⁾。

4.1 分析結果

上記の37例の中には、第3節で検討した用例と同様、特定の共起表現の影響を受けて命令の解釈がもたらされる用例が確認された。一方、他の用例の場合、先の共起表現は存在していないものの、前後の文脈の影響を受けて、*be going to do* が命令の解釈を得るものもあった。本節では、各用例について検討し、一見、*be going to do* に命令の解釈を与えているこれらの要因が、実際は、命令の解釈を引き起こすために必要不可欠な役割を果たしているわけではないことを示してゆく。

4.1.1 共起表現との関係

ここでは、「共起表現」によって *be going to do* に命令の解釈が得られる用例を個々に分析していく。

(9) The idiotic smile faded from her face, and she pinched his arm as hard as she could and held it; and when he did not flinch or change his expression or hit her, she fell against him. **“You’re going to take me back now,”** she cried. He grabbed her wrists in one hand and her chin in the other so she would have to look at him. She was trapped, but he did not hurt her. “No,” he said. “I’m never taking you back . . .” —brbooks, BB-iM86-114

この文中には now が明示されていることにより、「今すぐに」という意味が与えられ、切迫感が生じていると考えられる。この切迫感は now の存在のみならず、1行目における「力の限り彼の腕をつねった」(pinched his arm as hard as she could)、そして3行目の直接話法伝達部が示すように、泣いたという行為からも窺い知ることができる。この now の存在ゆえに、話し手は未来時ではなく、発話時において行為が達成されることを要求していると考えられ、“You’re going to take me back now” に「今すぐ私とよりを戻して」という、第2節 (4c) における「要求」の解釈が得られる。

(10) Todd kept on haranguing him (= Maxine). “You’re the freak here, you know that?” Todd yelled. “You fuck with our lives, you fuck with our heads. Well, **you’re not going to fuck with me anymore**, because I’m not playing your game anymore. Hear me? I’m not playing!” —brbooks, BB-M012078

この文中では、副詞 anymore が用いられているが、anymore は否定文中で用いられると「もはや…しない」、「これ以上…しない」という意味を表す語となる。結果、「これ以上…しないで」という読みが与えられ、「これ以上自分をいらいらさせるな」という、第2節 (4b) における「禁止」の解釈が得られる。

(11) “All right, Loretta,” Mitchell said. “Calm down.” “Don’t you condescend to me,” Loretta replied, her voice monotonal. **“You’re going to listen to me for once in your pampered little life.** We’re in a mess here. Do you understand me?” Mitchell just stared, which inflamed Loretta all the more. — brbooks, BB--M012097

この文中では、副詞句 for once が用いられており、これは、「一度でいいから」という意味を表す。この表現の存在により、「一度でいいから…してよ」という意味が与えられ、「今まで好き勝手なことをしてきたちっぽけな人生の中で、一度でいいから私の話を聞いてよ」という、

第2節 (4c) における「要求」の解釈が得られる。

(12) “... I am going to tell you the story of the Good Samaritan. Then you have got to act it in your own words. So sit down quietly everybody and listen carefully.” I launched into the parable embellishing the story with invented dialogue and extra details not to be found in the Authorized Version. “Now you **are going to** act what you have heard. . . .”

—brbooks, BB--M93--914

これは日曜学校でのやり取りを描いた場面である。この文中において、文頭に位置した *now* は、「さあ、ほら」のような、要求の意を強める強意語であると考えられ、命令表現を導く要素であると判断される。その結果、「それじゃあ、聞いたことを演じるんだ」という、第2節 (4h) における「指示」の解釈が得られる。

(13) “She—she looks so frail!” Evelyn faltered. “That will soon improve. You’ll see it when you come next Sunday.” Matron touched a bell. “Now **you’re going to** have coffee with me, you look as if you needed it!” Matron should have been off duty by this time, but she had a warm heart for any of the children of the patients. —brbooks, BB-cF911112

この文においても、上記の (12) と同様、文頭に位置した *now* は要求の意を強調する強意語であると考えられ、命令表現を導く要素となる。その結果、「さあ、私と一緒にコーヒーを飲みましょう」という、第2節 (4i) における「勧誘」の解釈が得られる。

(14) Helmer: Do you remember last Christmas? (途中省略) Ugh, I never felt so bored in all my life.

Nora: I wasn’t the least bit bored.

Helmer: But it turned out a bit of an anticlimax, Nora.

Nora: Oh, you **are not going to** tease me about that again! How was I to know the cat would get in and pull everything to bits?

Helmer: No, of course you weren’t.

—usbooks, BU-pm951423

この文中において、文末におかれた *again* は否定文で「二度と(もう)…しない」という意味を表すものであり、その結果、「二度とその事で私をからかわないで」という、第2節 (4b) に

おける「禁止」の解釈が得られる。

4.1.2 前後の文脈との関係

続いて、「文脈」が *be going to do* の命令的解釈に影響をもたらしたのであろうと一見見受けられる用例について検討していく。

(15) “Drowned?” “I presume.” “You’re wrong. I had an autopsy done. I’m told he was smothered by a pillow or cushion. What does this tell you?” “He was murdered?” “So that it would look like suicide.” “And **you’re going to** tell me why.” —brbooks, BB-XM032360

“He was murdered?” という台詞から、発言者は彼が殺害されたのかどうかを知りたがっていることが分かる。それに対する答えとして聞き手は、“So that it would look like suicide.”と、自殺に見せかけて殺されたのではないかという推測を述べているが、「なぜ殺害されたと考えられるのか」を発言者は知りたがっていることから、「どうして殺されたと考えられるのかを教えて」という、第2節 (4c) における「要求」の解釈が得られる。

(16) “I’m bringing out the cake. Everyone is here. We’re going to sing happy birthday. **You are going to** come out and be nice. . . .” —brbooks, BB--F022026

これは、話し手がトイレのドア越しに、トイレの中に閉じこもっている相手に呼びかけている場面である。話し手は相手の誕生日を祝おうとバースデーソングを歌おうとしている。その話し手の元へ来ることを明示しているということは、「(聞き手に取って利益となることをしてあげるから) どうか出ておいでよ」という、第2節 (4i) における「勧誘」の解釈が得られる。

(17) Alex! It’s me, Livy! **You’re not going to** push me off and treat me like a stranger. Don’t you remember, we’ve loved each other since we were kids! . . . Oh, Alex, for God’s sake, kiss me, hug me! —brbooks, BB--F86-113

これは、話し手 (Livy) が聞き手 (Alex) に、過去に二人で体験した出来事を引き合いに出して自分のことを思い出させようとしている場面である。それを踏まえると、“You’re not going to push me off and treat me like a stranger?” は、「(自分の事を覚えているだろうから) 自分をよそ者扱いしないで」という、第2節 (4b) における「禁止」の解釈が得られる。

(18) ... a Congressman explained to his new press aide, “We are going to mail, mail, mail and then mail some more. **You’re going to** mail until you run out of ideas. Then **you’re going to** talk to the rest of the staff and mail until they run out of ideas. After that **you’re going to** come to me and mail until I run out of ideas. . . .” —usbooks, BU-Wm951436

これは、アメリカ議会の議員による郵便無料送達の特権の濫用について取り上げた記述の一部である。議員自身が選挙で再選されることを確実化する目的で、政策主義の宣伝を行う際に当該特権が濫用されると説明されており、ある議員が広報活動の助手（press aide）に説明を行う場面が描かれている。最初に、“We are going to . . . some more.” の形で自分たちの計画を示した後に、you’re going to の文が3つ並列されていることが分かる。注目すべき点は、2文目と3文目の文頭に、それぞれ Then と After that という、行為の順序を指示する語句が用いられていることである。以上の事実を総合すると、ここでは be going to *do* に、第2節（4h）における「指示」の解釈が得られる。

(19) He (=Mick) seemed to be losing control of himself. Grabbing Officer O’Hara’s gun out of his holster, Mick shrieked, “**You are not going to** lock me up for a crime I didn’t commit!” He kicked the overturned chair out of his way and made a desperate dash across the room, . . . —usbooks, BU-aF93-904

“You are not going to . . . !” を発言する前にとった「銃を抜き取る」という行為や同発言内に用いられた感嘆符から、話し手 Mick の発言には切迫性があると考えられる。その上で、“not going to lock me up for a crime I didn’t commit”（犯していない罪で自分を刑務所には入れない）を2人称主語の平叙文で用いたとなれば、第2節（4b）における「禁止」の解釈が得られる。

4.2 結果と考察

ここまで、be going to *do* に命令の解釈をもたらす引き金となる要因について議論してきた。そして、その要因として、特定の表現が共起することと、前後の文脈関係に起因するものの2種類を指摘した。前者については、第3節で概観したように、be going to *do* が命令の解釈を得る必要十分条件ではないことが、インフォーマントの指摘によって既に明らかとなっている。後者の場合、前者と違って文中に命令表現の引き金であることを明示するような要素が含まれていないため、文脈が存在しない場合、換言すると、be going to *do* を含む文を単体で用

いた場合、be going to *do* が命令表現として機能しない可能性があると考えられる。しかしながら、同インフォーマントは、WordBanksOnline で得られた後者に関する用例に対しても、前後の文脈に関係なく be going to *do* に命令の解釈を与えることが可能であるとの見解を示した。前後の文脈がなくても命令として解釈することができるほど、you を主語にして「すでに決まった予定」であるかのように聞き手に対して明言する you are going to *do* の形は、聞き手に特定の行動を強いる話し手の強い気持ちを表すことができるということであろう。一見、前後の文脈が関係していると思われるような脈絡においても、(8) の要件は十分成立するものと考えられる。

一方、(8) の要件を満たさない以下のような環境では命令の解釈は得られない。

(20) be going to *do* が if 節で用いられている場合：

〔以下は料理のレシピの一部である〕

Add the remaining 2 cups of peas and the mint and cook for 2 minutes. Remove from the heat and puree in a food processor or blender until very smooth. Strain if necessary. 3. If you **are going to** serve the soup cold, cool down as quickly as possible.

—usbooks, BU-mm89-533

(21) you を主語とする文において、be going to *do* が間接話法中に用いられている場合：

You say **you're going to** do it and then you do it. Man, it's kind of bold. Know what I'm saying?

—usnews, NUA--020610

(22) be going to *do* 内の動詞が自制不可能なものになっている場合：

You see, boys, your pilot's licences are for land planes—and **you're going to** require seaplane ratings for this trip. I want you to know how to handle a float plane,...

—usbooks, BU--M631086

5 命令文と命令用法としての be going to *do*

本節で議論の対象とするものは、命令文と be going to *do* を用いた命令表現の違いについてである。始めに指摘したように、英語において命令を下す場合に通例用いられるのは命令文である。その代わりとして、be going to *do* を用いて命令を下すことでどのような違いが生じるのかを、可能な限り検討していく。

Carrell and Konneker (1981: 27) は、42人の英語母語話者のグループと73人の ESL 学習者

のグループを対象に、文の法 (mood)・法助動詞の有無・文の時制⁵⁾ の3種類の観点から、相手に要求を伝える際に用いる8種類⁶⁾ の表現において、丁寧さの高さの関係がどのようになっているかを比較する研究を行い、その結果、それぞれの項目について以下の見解を示している⁷⁾。

(23) 文の法

文の法は、丁寧さの高低を決定づける最も重要な要素であり、平叙文・疑問文・命令文の3種において、疑問文が最も丁寧さが高く、命令文が最も丁寧さが低い。

(24) 法助動詞の有無

法助動詞の有無は、文の法の次に丁寧さの高低を決定づける要素である。疑問文中では、さほど丁寧さを高めることには繋がらないが、平叙文中に用いると丁寧さを高めることに貢献する。

(25) 文の時制

過去時制は現在時制より丁寧さが高い。

be going to do を用いた文は形式上、平叙文とみなされるため、(23) の観点から見れば、命令文に比べて丁寧さが増すと考えられる。

命令文と比較した場合は、(23) の考察で解決できるが、will や must など他の法助動詞を用いた命令表現と比較する場合、be going to do の位置づけについて考慮しなければならない。というのも、be going to do が法助動詞の一種であるという主張がなされているからである。Collins (2009: 147) は be going to do を語彙法助動詞 (lexico-modals) の一つであると主張しており⁸⁾、名称こそ違えど、be going to do が法助動詞に類似した振舞いをするという見解を示していることが分かる。本稿の主旨は命令文による命令と be going to do を用いた平叙文による命令の比較であるため、be going to do の法助動詞的振舞いは議論の対象外とするが、法助動詞を用いた命令表現と比較する場合、この議論を避けて通ることはできないだろう。

6 おわりに

be going to do が命令の解釈を得るために、特定の表現との共起と、前後の文脈関係が一見必須の要因と思われるが、実際には命令の解釈の成立条件はそれほど厳しくなく、先に挙げた3つの必要最低条件を満たせば、少なくとも命令の解釈を許す環境が整うことになる。これに話し手の音調・身振り・表情などが加わり、命令の解釈が揺るぎないものとなる⁹⁾。冒頭で述

べたように、be going to *do* は「すでに決定された主語の意図」を表すため、you を主語としてこれを聞き手に対して明言することで、聞き手の行動に制約を課すこととなり、その結果 be going to *do* に命令の解釈が与えられることとなると考えられる。

また、命令文と be going to *do* を用いた命令表現は丁寧さの点で差異があり、be going to *do* による命令表現は命令文に比べて命令の度合いが和らぐという主張が提唱されていることが確認された。しかし、平叙文による命令表現は be going to *do* のみならず、例えば、現在進行形を用いた命令表現も存在する。この2種類の表現に何らかの使い分けに関する基準があるのかという事も今後の重要な研究課題となる。EFL/ESL 辞書等において、この種の語用論的な命令表現の記述も十分ではなく、今回の研究が命令表現の研究の進展に繋がる契機となれば幸いである。

注

- 1) 命令を下す者と与えられる者の社会的立場が対等な場合もあれば、前者と後者がそれぞれ、上司と部下、親と子供、教師と学生のように、両者の社会的立場の差がはっきりしている場合もある。
- 2) 本研究では、50歳代の男性イギリス人英語話者（大学英語教員、英語学専攻）と50歳代のオーストラリア人女性英語話者（大学英語教員、英語学専攻）にインフォーマントとしてご協力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。
- 3) 命令文の主語について、Quirk et al. (1985: 828) は、“It is intuitively clear that the meaning of a directive implies that the omitted subject is the 2nd person pronoun *you*.” と指摘している。また、命令文の内容について、Quirk et al. (1985: 827) は、“Imperatives are restricted to predications that allow a dynamic interpretation, hence the incongruity of **Need a car*, **Be old*, **Sound louder*.” と指摘している。(8a) および (8c) は、左記のそれぞれの主張を基にした仮説である。命令文に用いることが可能な動詞について、Ljung (1974: 132) は、主語が「制御可能なもの」(controllable) であると主張している。
- 4) ページの制約上、実際に本稿で取り上げる用例は37例中11例である。
- 5) ここでの時制とは、「法助動詞」の時制を指している。
- 6) ここで用いられた8種類の表現は次の (a) から (h) に示すものである：(a) Could you give me a pack of Marlboros? (b) Can you give me a pack of Marlboros? (c) Do you have a pack of Marlboros? (d) I'd like a pack of Marlboros. (e) I'll have a pack of Marlboros. (f) I want a pack of Marlboros. (g) Give me a pack of Marlboros. (h) A pack of Marlboros.
- 7) Carrell and Konneker (1981) の研究では、英語母語話者グループと ESL 学習者グループの間で幾分の違いが見られたものの、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999: 234) は、以下の順で丁寧さが高くなると指摘している：(a) A glass of water. (b) Give me a glass of water. (c) I want a glass of water. (d) I'll have a glass of water. (e) I'd like a glass of water. (f) Do you have a glass of water? (g) Can you give me a glass of water? (h) Could you give me a glass of water?

- 8) Collins (2009: 16) の lexico-modals は、Quirk et al. (1985: 143-146) の semi-auxiliaries を言い換えたものである。Be going to, be able to, be about to, be apt to, be bound to, be due to, be likely to, be meant to, be obliged to, be supposed to, be willing to, have to の計12種類の表現が該当すると指摘している。
- 9) この主張は柏野 (2010: 12) に基づくものである。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社。
- Carrell, Patricia and Beverly Konneker (1981) "Politeness: Comparing Native and Nonnative Judgements." *Language Learning*, 31, 17-30.
- Celce-Murcia, Marianne and Diane Larsen-Freeman (1999) *An ESL/EFL Teacher's Course*. Second Edition. Boston: Heinle and Heinle.
- Coates, Jennifer (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Collins, Peter (2009) *Modals and Quasi-modals in English*. New York: Amsterdam.
- 柏野健次 (2012) 『英語語法詳解』 東京：三省堂。
- Ljung, Magnuis (1975) "State Control." *Lingua*, 37, 129-50.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*. Third edition. London: Oxford University Press.
- 安井稔 (1994) 『現代英文法総論』 東京：開拓社。

On the Imperative Use of *Be Going to Do*

TATARA Taira

The structure *be going to-infinitive* (in informal style, *be gonna bare-infinitive*) is usually used to talk about future actions already planned or decided by the subject of the sentence. When the sentence containing *be going to-infinitive* has *you* as subject, as in “*You’re not going to play football in my garden*”, however, it is the intention of the speaker rather than the subject that is expressed. In other words, *be going to-infinitive* can be used as an imperative expression despite the fact that generally imperative sentences such as “Don’t play football in my garden” are used in giving a command.

Bearing this fact in mind, this paper discusses the imperative use of *be going to-infinitive* with a focus on two research topics. First, by employing previous studies and one of the largest corpora available in the world, Wordbanks*Online*, we shall consider the contextual expressions which contribute to *be going to-infinitive* being interpreted as an imperative expression. We shall also look at the context in which such *be going to-infinitive* is used. Second, we shall examine differences in use between imperative sentences and the imperative use of *be going to-infinitive*.